石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第468号　令和4年10月1日発行

加賀宝生のすべて　―能面と能装束―

特別陳列　Water Planets
―永遠の瞬間（とき）を前にして―中島範雄展【油彩画】

《唐織　唐花亀甲に開扇模様》前田育徳会蔵
―「加賀宝生のすべて―能面と能装束―」より―

中島範雄《天地創造》
―「Water Planets―永遠の瞬間を前にして―中島範雄展」より―

特別陳列　小堀遠州と前田家【前田育徳会尊經閣文庫分館】

茶の湯の美【古美術】

みんなで楽しむ　はじめての工芸Ⅱ【近現代工芸】

優品選【近現代絵画・彫刻】

- 土曜講座を開講します（11～3月）
- 〔展覧会回顧〕生誕150年記念　板谷波山の陶芸
- 学芸室の人々
- 10月の行事予定
- アラカルト　ただいま展示中

企画展（第7～9展示室）

加賀宝生のすべて ―能面と能装束―

主催／石川県立美術館　特別協力／北國新聞社
後援／NHK金沢放送局、MRO北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、HAB北陸朝日放送

9月17日（土）～10月23日（日）　会期中無休

先月の十七日から始まった「加賀宝生のすべて―能面と能装束―」の今後の見どころをお伝えしましょう。

一部の作品について展示替えを行うため、十月六日から十三点を新たに紹介します。中でも畠山記念館が所蔵する《唐織（からおり）　雲に雪持椿（ゆきもちつばき）模様》は必見です。「雪持椿」とよばれるこの唐織は、今日の宝生流において、〈道成寺〉専用とされています。

わきあがるような金雲の間から、大きく咲き誇る椿が見えます。冬に咲く椿には、たくさん雪が積もりますが、寒さにも負けない生命力溢れる姿を表現した迫力ある能装束です。室町時代に能登国の守護であった畠山家の末裔にあたる畠山一清（いっせい）（即翁）のコレクションのひとつで、昨秋京都国立博物館にて開催された特別展『畠山記念館の名宝』でも公開されました。

さて、この「雪持椿」ですが、江戸時代の後期に、徳川御三卿のひとつである田安家において能装束の模様などを記録した『獻英楼畫叢（けんえいろうかそう）』に、既に「宝生流大夫家形」として記録されており、宝生流独自の唐織とわかります。しかし、この頃はまだ〈道成寺〉専用ではなかったようです。この唐織を包む畳紙には「〈花筐（はながたみ）〉〈熊野（ゆや）〉〈船弁慶（ふなべんけい）〉〈乱（みだれ）〉がよい」と記されています。能装束研究において、こうした文字資料をともなうことは稀であり、貴重であることを物語る一例です。十月十六日の講演会では、染織研究の第一人者である長崎巌先生をお迎えし、『獻英楼畫叢』などの文字資料からみた近世大名家の能装束についてお話しをうかがいます。是非、ご聴講ください。

■展覧会構成
一、能面の「いろは」
二、能装束の「いろは」
三、能装束の畳紙にみる加賀藩主―斉広・斉泰―の能
四、狩野芳崖がみた能装束

■会期　令和四年九月十七日（土）～十月二十三日（日）
〈会期中無休〉
※会期中、一部作品の展示替えを行います。
（前期：九月十七日～十月五日／
後期：十月六日～十月二十三日）

■観覧料　一　般　一、〇〇〇円（八〇〇円）
大学生　八〇〇円（六〇〇円）
高校生以下　無料
（　）内は20名以上の団体料金

■関連行事
◇講演会
「大名家伝来の能装束
―『獻英楼畫叢』や畳紙を通じてわかること―」
講師　長崎　巌氏（共立女子大学博物館長・家政学部教授）
日時　10月16日（日）13時30分～15時
会場　石川県立美術館ホール
〈聴講無料・申込不要〉

《袷狩衣 竹立涌に松竹梅丸模様》髙島屋史料館蔵　《長絹 秋草熨斗包に芭蕉雪輪模様》野村美術館蔵　《唐織　雲に雪持椿模様》畠山記念館蔵

前田育徳会尊経閣文庫分館
特別陳列
小堀遠州と前田家

9月10日（土）～10月23日（日）　会期中無休

今回は、改めて藤原定家自筆の重文《十五首和歌》に着目します。本作は、定家が一二二七年の春に、後鳥羽天皇の第二皇子・道助法親王家で行われた十五首歌会における自身の詠歌を筆写した懐紙を継いで、幅一六五センチに及ぶ大幅に仕立てたものです。もとは寛永の三筆に数えられる書家・画人の松花堂昭乗が所蔵していましたが、その後、加賀藩三代藩主・前田利常が所望し、昭乗の茶道の師匠だった小堀遠州を通じて入手したようです。

茶の湯の興隆により、定家の真跡を所有することは、大きなステイタスだったことを思うと、この大作に対する利常の執心も理解できます。本作は、寛永六年（一六二九）四月二十九日に前将軍の徳川秀忠が前田家の本郷邸を訪れた際に飾られました。幕府や朝廷に対して、文の力によって自身の主体性を表明した定家の、類例を見ない真跡を前将軍に「見せつけた」利常の深意は容易に想像できます。なお、この二年後に利常は、金沢城の修築や船舶の購入などによって幕府から謀反の嫌疑をかけられ（寛永の危機）、嫡男・光高とともに江戸に赴いて弁明しています。

今回の展示では、「名物裂」も大きな見所となっています。名物裂とは、鎌倉時代から江戸時代初期にかけて主に中国から渡来した染織品の総称です。小堀遠州の業績として特筆されるのは、名物茶入に付随することを前提として、これらの染織品を体系化したことです。

さらに遠州は、茶入の仕覆を仕立てた余り裂により手鑑《文龍帖（もんりょうちょう）》も制作しています。

重要文化財《十五首和歌》藤原定家
前田育徳会蔵

学芸員の眼

「弘化二年二月四日 御〇〇御〇〇〇〇　栄〇院極〇上」

歴史博物館の学芸員だった平成十二年に記した、お粗末な私の調査カードです。弘化二年に仕立てられた長絹の畳紙に記された字をまったく読めていません。恐る恐る近世史専門の先輩学芸員にたずねたところ「こんなもんも読めんのか」と呆れられたのを、今でも覚えています。

美術館へ異動になり、手つかずとなっていた所蔵品の能装束の畳紙墨書について調べはじめたところ「うちにもあるよ」「ここで見たよ」というご連絡をいただくようになりました。現在、弘化二年に藩主斉泰の脚気治癒を祝って贈られた能装束は、他に三領見つかっています。今回展示する姫君から贈られた袷狩衣もそのひとつです。

《竹立涌に松竹梅丸模様 畳紙》

古美術（第2展示室）

茶の湯の美

9月10日（土）～10月23日（日）　会期中無休

今年は、千利休の生誕五〇〇年にあたります。そこで今回は展示中の作品から、利休を敬慕した二人の作者に注目したいと思います。最初は、俵屋宗達です。二〇一三年に開催された「俵屋宗達と琳派」展で明らかにしたように、利休の養嗣子・少庵を茶会に招くほどの茶人だった宗達は、利休の遺偈を見据えて国宝《風神雷神図》に至る画境を深化させていきました。今回展示されている石川県指定文化財《槇檜図》は、落款の書体などから、宗達晩年の作と判断されます。本作は総金箔地ではなく、二ミリ大を基調に、大きさの異なる金の切箔を克明に蒔き、そこに墨、藍、藍墨の濃淡を駆使して槇、檜、樅が描かれています。作品の深意に関する考察は、当館ホームページの「学芸員コラム」#65に譲りますが、芸道における稽古の極意が含意されているとも解釈できます。

注目したいもう一人は、松尾芭蕉です。芭蕉は、俳諧紀行『笈の小文』で〝西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。〟と述べています。同書の刊行は芭蕉の没後ですが、成立時期は、利休没後一〇〇年にあたる一六九一年頃と考えられています。芭蕉が、比較的新しい時代の利休を、西行や雪舟と同格に論じていることは、利休敬慕の気運が高まっていった時代にあって、その壮絶な生き様に対する、芸術家としての敬意を表明したものと考えられます。今回は、芭蕉の石川県指定文化財《温泉頌山中の句》を展示しています。本作は一六八九年、「奥の細道」の途次に山中温泉で書かれたものです。

石川県指定文化財《槇檜図》俵屋宗達

近現代工芸（第5展示室）
みんなで楽しむ

はじめての工芸Ⅱ

9月10日（土）～10月23日（日）　会期中無休

前号でも触れましたが、今回の展示では作品と一緒に工程見本が展示してあります。「どのような材料が使われ、どのような工程で作品となるのか？」が簡単ではありますがわかる展示となっています。

展示室入口の壁面ケースは、夏から秋の季節にかけて、ご家族や学校団体として訪れる機会も多く、お子様の目線にあわせ低くなっています。夏休みにお子様と来館され、展示室でのお子様の気づきから、「なるほど、それは面白い！」と感じられた方も多かったのではないでしょうか。

Ⅱ期の展示は、羽田登喜男《友禅空色地孔雀羽文振袖「瑞祥文」》や、堀友三郎《夜のしじま》からスタートします。どちらも鳥に関する作品ですが、今回は、鳥が描かれている作品を多めに選んで展示しました。展示室内に隠れている鳥を探しながら鑑賞を進めていただけます。また、鳥だけではなく他にも生き物が隠れています。動物、植物、虫など何が描かれているかをみつけることの楽しさを感じ、次に、みつけたものはそれぞれがどう表現されているのかの違いなどを楽しみ、「楽しいなあ」という大きな思いが「面白いなあ」「凄いなあ」「綺麗だなあ」と、興味の目が徐々に細かい部分にも深い部分にも広がって行けばと思います。この機会に是非ゆっくりと作品を楽しみに来ていただければと思います。

堀友三郎《夜のしじま》

油彩画（第4展示室）
特別陳列
Water Planets
―永遠の瞬間（とき）を前にして―中島範雄展

9月10日（土）～10月23日（日）　会期中無休

中島作品は、ステンドグラスにも例えられるほど、鮮やかで透明感のある色が印象的です。絵具を混ぜることなく何層にも薄く塗り重ね、下の層まで光を透過させることで、キャンバスの中に光と奥行を生み出しています。特に近作は、以前にも増して、光が満ち、空間的な広がりを感じさせますが、これは「光ある色」を追求してきた中島が至った一つの境地なのでしょう。

「永遠の瞬間（とき）を前にして」と副題にもなっていますが、本展示を進める中で中島は、「永遠」とは何か、それを前にした自分は何か、の答えを探しているようでした。作品の色使いや技法を味わうのはもちろん、中島はこの問にどう答えたのか、ご自身ならどう答えるか、少し考えながらご鑑賞いただくのもよいかもしれません。「解釈は見る人の自由」「仕事やコロナで疲れた人が私の絵を眺めているうちに、たとえ数秒でも別世界へ行けるような、安らぎを感じられる空間にしたい」というのが中島の強い思いで、本展示ではみなさまには自由にご観覧いただくため、右記の問いかけ以外の解説はあえて置かず、順路も指定しておりません。時間を忘れてゆっくりと中島の世界観に浸ってみてください。

中島範雄《黎明》

近現代絵画・彫刻（第3・6展示室）
優品選

9月10日（土）～10月23日（日）　会期中無休

第3展示室の「空」にまつわる展示について、彫刻分野からは木村珪二《若竹》を紹介します。東京教育大学に設置された野外彫刻と同形で、「君子は竹を愛す、竹の直ぐなるをもってす」という故事にちなんだという記事が残っています。現実より長く引き伸ばされた人体は、台座上の像を見上げる想定からのものと思われますが、すくすくと空に向かって成長する若竹と、若人の成長への願いを象徴するようです。

油彩画分野の田浦隆透《上空にて・A》は、青空に浮かぶ割れた卵の殻の中から、白い蝶が舞い出る様子を描いています。清々しさと同時に儚さも感じさせる本作で、田浦は第三十二回現代美術家協会展で初入選し、新人賞を受賞しました。

版画分野からは、小林敬生《蘇生の刻―静止した刻》を紹介します。椿等の硬い木の木口を利用し、細密な表現を特徴とする木口木版を手がける小林敬生は、独特の空間表現で、様々な生命と文明のハーモニーという壮大な物語を描いています。「紙の宝石」と評される木口木版での小林敬生の世界観をお楽しみください。

第6展示室の日本画では、「月」の他に「水と生命」という共通テーマで四点を展示しています。そして図らずも三点に鯰が描かれていました。石川義《琵琶湖の主と仲間たち》、大沼憲昭《鯰談義図》、安嶋雨晶《池心》です。どれも、そこはかとないユーモアを漂わせているのは、鯰の姿態が成せる技かもしれません。三者三様の表現を展示室でご確認ください。

田浦隆透《上空にて・A》

土曜講座を開講します（11～3月）

5月より開講している土曜講座について、11月以降の予定をお知らせいたします。
当館学芸員が日ごろ研究しているテーマや、開催中の展覧会に関連したテーマで行う講座となっております。お気軽にご参加ください。
※新型コロナウイルス感染症の影響で日時などを変更、または中止する場合がございます。

時間：毎回午後1時30分から3時まで　事前申し込み不要、聴講無料

月／日	テ　ー　マ	担　　当
11月12日	仏像は語る４	谷口　出
11月19日	洋画家たちのフランス	谷岡　彩
12月3日	コレクション展（近現代工芸）　スライドトーク	西ゆう子
12月10日	戦後の日本版画	深山千尋
1月21日	金工ことはじめ	竹内　唯
1月28日	明治時代の九谷焼	奈良竜一
2月4日	明治の輸出工芸と博覧会	寺川和子
2月18日	来迎図―往生への祈り	鈴木彩可

ご参加にあたっての注意事項

① 来館時にサーマルカメラによる体温チェックを行います。
　発熱等体調に不安がある方の参加はご遠慮ください。
② マスクの着用、手指消毒の徹底をお願いいたします。
③ 参加時は受付名簿に氏名と連絡先をご記載ください。
④ 会場内では会話を極力ご遠慮ください。

展覧会回顧

生誕150年記念 板谷波山の陶芸

6月25日(土)～7月24日(日)　会期中無休

石川県立美術館における板谷波山の展覧会は、前回が平成七年(一九九五)であり、実に十七年ぶりでした。展覧会を見ることによって、板谷波山という人物の物語を紡ぐように構成されており、その意図を大切にしながら、展示室に作品を配置しました。

第一室ではまず、綺羅星のような波山の代表作を導入部として紹介、次いで「波山」以前の日々として、生まれ故郷筑西市との関わり、東京美術学校での学生時代、陶芸家としての素地を作った、石川県立工業高等学校での研究成果を紹介しました。第二室では、アールヌーヴォーの影響下の作品から、葆光彩磁誕生までの作品を展示しましたが、その間を埋めるものとして波山自身が砕いた失敗作の陶片と併せて、極限まで生活を切り詰めて制作した、波山の手記をパネル展示しました。

常人には理解しがたい芸術家の業の深さが、その後葆光彩磁技法を完成させ、最高傑作と称される、重文《葆光彩磁珍果文花瓶》(泉屋博古館東京蔵)に結実したことを表すため、第三室に大きくスペースを取って配置しました。

会期中には展覧会の監修者である、荒川正明氏の著書を原案とした映画「HAZAN」の上映会を行い、展覧会と併せて多くの方々がご参加されました。類まれなる作品を生み出した板谷波山が、石川県ゆかりの作家であることを知っていただく良い機会でした。

最後に本展開催に際し、ご協力を賜りました方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

学芸室の人々

西　ゆう子(普及課 担当課長)

児童生徒の皆様に関わることを中心に顔を出しております。中学校教諭よりの異動でこちらに来ましたが、多感な中学生との奮闘と感動の日々のなか「いかにみんなに解りやすく伝えるか」を思い接していました。現在も思いはそのままです。そんな私の楽しみは、ホールなどで身体中で音楽を聴くことです。前回このように書いていたときはまだ現場に行くのは難しいと嘆いていたのですが、ようやく身体中で音を浴びる、音楽に包まれる機会に恵まれるようになってきました。皆様の無くなっていた楽しみは徐々に戻ってきていますか。美術館は作品鑑賞を通して心躍るなにかをお届け続けています。それをみつけに是非ご来館ください。

10月の行事予定

■土曜講座　13時30分～15時　美術館講義室　無料

1日(土)	「龍村平蔵の名物裂復元」　学芸第二課長　寺川　和子
8日(土)	「小堀遠州と前田家」　担当課長　村瀬　博春
15日(土)	「加賀宝生と前田家―綱紀・斉泰・利鬯―」　学芸専門員　村上　尚子

■企画展「加賀宝生のすべて―能面と能装束―」関連行事　講演会　13時30分～15時　美術館ホール　無料　申込不要

16日(日)	演題:「大名家伝来の能装束―『獻英楼畫叢』や畳紙を通じてわかること―」 講師:長崎巌氏(共立女子大学博物館長・家政学部教授)

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.64

《割レ目ノ襞ノ中二》われめのひだのなかに

幅51cm 奥行57cm 高さ51cm
1988年(昭和63)

中村錦平 なかむらきんぺい
昭和10年～(1935～)
サントリー美術館大賞展 '88

本作は、「サントリー美術館大賞展'88」に九点一組で出品された「デコレーション ―自律しない空間のために―」の一つで、日本趣味の解題としてのやきものを、「飾る」という文脈のなかで制作した作品です。この連作は、日本陶芸の伝統、つまり、桃山時代以降の陶芸の美意識、機能美や技を批判的に分析し、それを挑戦的に造形したもので、作者は、この行為を通じて、新たにみえてきた日本文化の側面を「日本趣味」としてとらえています。

作者の言う「日本趣味」とは、陶芸だけでなく、盆栽や盆景、生花、俳句など、日本人の心に大きな感動を与える伝統的な技芸をさします。また、「飾る」という行為は、人間が空間やモノと交感するための直接的な欲求で、日本では様々な飾りで空間を埋め尽くしているものと理解しています。

作品は「石っぽさ」を題材とし、陶でつくられた岩の上に、型成形でつくられた陶製の木、石、貝(これらは「日本趣味」を支えてきた素材)や工業製品のようなものが空間を埋めるように無造作に飾られ、色彩が施されてます。

日本人のもつ伝統的な「飾る」という感覚が充分に表現され、さらに、「日本趣味」に対する現代的な回答を、陶により造形化した作品ともいえるでしょう。

中村は、金沢市に生まれました。父は茶陶の名人中村梅山です。金沢美術工芸大学彫塑科を中退し、作陶を始めます。一九六九(昭和四四)年ロックフェラー財団より招聘され、日米の陶芸を研究しました。帰国後、多摩美術大学で現代陶芸の講座をもち、二〇〇六(平成十八)年まで同校工芸学科で教授を務めました。

次回の展覧会

令和4年10月28日(金)
～12月11日(日)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第２展示室	第５展示室
加賀藩の美術工芸	石川県の文化財 ―国宝・重文・県文・市文―	優品選 【近現代工芸】

第３展示室	第４展示室	第４・６展示室	１F企画展示室
Voyage ―海外を旅する― 【近現代油彩画】	画家の版画 【近現代版画】	優品選 【近現代絵画・彫刻】	第69回 日本伝統工芸展 金沢展 〔10/28～11/6〕

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　370円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　)内は団体料金
10月3日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後6:00 年中無休

10月の休館日は
24日(月)～27日(木)

広告
『石川県立美術館だより』に広告を掲載しませんか?
石川県立美術館友の会会員・石川県立美術館協力者・県内各行政機関及び文化施設・全国の美術館・博物館へ 郵送配布! 2,500部発行
詳しくはお問い合わせください
WEBお問合せフォームはコチラ
Wit 株式会社ウィット Tel.072-668-3275 株式会社ウィット 検索
〒569-0071 大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501 Fax.072-668-3276 HP.https://wi-t.co.jp/

石川県立美術館だより
第468号(毎月発行)
2022年10月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL https://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。